

鎌倉詩桜に飼いならされる 膝枕八幡宮

※本編と異なる箇所がある場合がございます※

01 吾輩は先輩である

【詩桜】 「やあ、ようこそ」

「今日はどうしたのかな」

【詩桜】 「ああ、理由がなければ別にそれでいい」

【詩桜】 「『近くを通りがかったから、私の顔を見に訪ねてみた』私の部屋を訪ねてくる理由は、君のそんな都合で充分だ」

【詩桜】 「私が？ 私も、今はちょうど暇を持てあましていた」

【詩桜】 「いや……はは、私に暇などないか」

【詩桜】 「そうだな、次の創作の切り口を捻りだしつつ、何かきっかけになればと、旅の行き先を探していた」

【詩桜】 「まあ、多少時間を持って余していたのには間違いない」

【詩桜】 「さ、上がるといい」

【詩桜】 「例の店で新しいコーヒー豆を見つけたんだ」

【詩桜】 「いま淹れるから、少し座つて休んでいると……ああ」

【詩桜】 「いけないな、私としたことがうつかりしていた」

【詩桜】

「君が急に来るというから少なからず気持ちが上
ずっといたようだ、パソコンを開きっぱなしにし
ていたとはな……」

【詩桜】

「ああそうだ、宿は、二人分の部屋をとるつもりで
探していた」

【詩桜】
「君さえよければ、また一緒にどうかと思つたん
だ」

【詩桜】
「まあ」れはれつきとした取材の一環だからな

【詩桜】
「経費として君の分の旅費は私がもどうじやない
か」

【詩桜】
「そう遠慮するな、私に付きあって、年から年中あ
ちこちへ連れまわされていたのでは、いかに君が
稼げうと貯金する余裕すらないだろ?」

【詩桜】
「たまには年上の人間に花をもたせる」

【詩桜】
「その代わり、多少は私の我儘に付きあってもらひう
が……」

【詩桜】
「『多少は』な」

【詩桜】
「フフ、何かを期待してくれても構わないぞ」

【詩桜】
「またあの日のように、私の膝の上へ君の頭をのせ
て、話そりじゃないか……」

【詩桜】 「ん、どうした驚いた顔をして」

「君と敵対していたかのようだった私が、これほど君に親しくしているのが不思議か?」

【詩桜】 「ふん、君は……私とのひと夏の思い出を覚えているのかな」

【詩桜】 「何故あれほど君に対して辛辣だった私が、これほど甘やかしたがりになってしまったのか……」

【詩桜】 「君を何故特別大切に想つているか、その理由が記憶にないというのなら、私との思い出を探しにいってくるといい」

【詩桜】 「なに、焦ることはない」

【詩桜】 「私は君と泊まる宿を探しながら、君との思い出に浸っているよ」

【詩桜】 「甘やかされたくなつたら、またここから話を始めようじゃないか」

【詩桜】 「まだここにいて、私の声を聞いているという」とは、私に膝枕されたいと解釈していいのかな

【詩桜】 「いいだろう、『一ヒーは冷めてしまうが……』までは君を甘やかさせてくれ」

【詩桜】

「ただ、いくら周りに人がいないとはいえ、とても他人には聞かせられない会話をするから……」

【詩桜】
「私の声が外へ漏れないよう、その耳でしつかり受けとめること」

【詩桜】
「さて、可愛がられる覚悟はいいな?」

02ひさ枕

【詩桜】

「さ、 今日も」く頭をのせるといい 「

【詩桜】

「ああ、 今日は……お座敷ではないから、 横向きに

なるな」

【詩桜】

「正面がよければソファーの上へのって正座するが……たまには」「ういっただ形もいいだろ?」

【詩桜】

「え、 おいで」

【詩桜】

「ん、 外を向くんだな」

【詩桜】
「てっきり顔を、 私の身体へ向けて寝るものだと考
えていた」

【詩桜】
「君が甘えたくなつたら、 この身体に顔をうずめる
ことができるだろ?」

【詩桜】
「それではさすがに恥ずかしかつたのかな……は
は、 まるで私が誘つているみたいだ」

【詩桜】
「そこまでのつもりはなかつたんだ、 許してくれ」

【詩桜】

「もちろん君から求められれば、 断るつもりもな
かつたが……まあ、 今日はまだ来たばかりだ」

【詩桜】

「その気にさせてしまったのならすまないな、 ます
は今の状況を楽しませてくれ」

【詩桜】

「以前は君の方が私の足に興味津々だったというのに、今では私が君を足にのせるのが好きなのだからおかしい」

【詩桜】

「とはいって、三浦大根だのなんだの言われたのは忘れてはいけないが」

【詩桜】

「はは、根に持っているわけではないから気にするな、むしろ感謝している」

【詩桜】

「君を生涯からかえるネタを提供してもらつたわけだからな」

【詩桜】

「今後とも私の大根足ネタは永久に言うよ」

【詩桜】

「ああそうだ、せっかくこの状況なのだし、大根足ネタのお返しの一環として、君の身体に触れさせてもらおうかな」

【詩桜】

「なに、酷いことはしない……耳を綺麗にしてやうというだけだ」

【詩桜】

「耳掃除……ではあるが、私の手元に耳かきはない」

【詩桜】

「だからこいつして……指で汚れをぬぐつてやる」

【詩桜】

「フフ、くすぐったいのかな……少し息が乱れてい るじゃないか」

【詩桜】

「ちなみにくすぐったさから逃れようとしても、全
力で抑えこむのでのそのつもりで」

【詩桜】

「ほら、耳をなぞられる気分はどうだ？」

【詩桜】

「繰り返すが、これは大根ネタの仕返しじゃない」

【詩桜】

「君を喜ばせようとして、とつている行動だとい
うのを忘れないでもらいたい」

【詩桜】

「もちろん、私自身が楽しんでいる部分もあるが…
…」

【詩桜】

「フフ、人の耳をいじるのは楽しいな」

【詩桜】

「君がつまらない意地を捨てられるのなら、私に甘
えてしまってもいいんだぞ？」

【詩桜】

「私に身体を預けてしまえるのなら、怖がらずに任
せててしまえばいい」

【詩桜】

「まあせつかくだ……耳の中も掃除してやる」

【詩桜】

「ははは安心するといい、耳かきで脳を搔きだした
りはない。今の私は優しい君だけの詩桜先輩だ
からな」

【詩桜】

「なに、他人の耳かきなどした覚えはないが、私は
やればなんでもできる。耳かきも得意に違いない、
任せおけ」

【詩桜】

「まあ君が生意気な口を聞けば、この耳かきがどーに刺さるかはわからないが……フフ冗談だよ」

【詩桜】

「これからも、こうした触れ合いは継続的に行つていきたいからな……今日で全てを台無しにするような真似はしない」

【詩桜】

「最初から覚悟を決めた相手を叩き斬るよりも、安心しきつて油断した相手を後ろからずぶりの方が面白いじゃないか……」

【詩桜】

「いや、ただのたとえ話だが。他意はない……」

【詩桜】

「さ、反対側の耳だ」

【詩桜】

「せつかくこうして君を膝の上へのせているのに、脅かしすぎたか……」

【詩桜】

「少しは優しい部分も見せなければ愛を疑われてしまいそうだ」

【詩桜】

「こうして普通の恋人らしい時間を過ごすのもまたにはいいじゃないか……君を膝の上へのせつつ、何気ない会話などしながら……」

【詩桜】

「いやしかし、そうだな……せつかくなら、こうして耳かきの時間も、君にまたとない景色など見せつけできれば最高だな」

【詩桜】

「伊豆諸島で別荘でも買って一人で出かけようか……いや、「うしてまつたりとした時間を過ぐ」のであれば、温泉のある町がいいかもしないな……山陰あたりはどうだろ?」

【詩桜】

「いいや、私は本気だぞ。今の生活も気に入っているが、やはりふとした弾みに、一人だけで愛しあうだけの時間と空間が欲しくなるときもある……私も君も、我を忘れて声をあげられるような……な」

【詩桜】

「なんだ、まだ本氣にしていないのか？ それなら君をその気にさせるため、少し大胆な行為もしようか……」

【詩桜】

「たとえば、こんな行為で君の男の子の部分を落かしてやるう……」

【詩桜】

「れろっ」

【詩桜】

「フフ、何を驚いている?」

【詩桜】

「君の耳の汚れをとる方法なら、耳かき以外にもあるじゃないか」

【詩桜】

「ほら」「うして……」

【詩桜】

「れろっ、れろ……れろっ……」

【詩桜】

「くすぐったいか？ 反応があれば私は楽しい」

【詩桜】

「…」

【詩桜】

「れろ……れろ、れろつ……れろ、はむつ」

【詩桜】

「ん？ 耐えられなくなってきたのかな？」

【詩桜】
「フフ、まあいいだろ？ 今すぐ君を果てさせるのが目的ではないしな……」

【詩桜】
「本當だ、軽くじやれあいのよくな悪ふざけがした
かつただけだ」

【詩桜】
「現に今は優しい気持ちでいっぱいだ……」うして
君の頭を撫でるのが楽しい」

【詩桜】
「母性……とも違う、なんだろうな」「これは」

【詩桜】
「他に対象がないから、私も『いりだ』とはっきり
り説明はしづらいんだが……」

【詩桜】
「母性といつては、もう少し愛欲の混ざった感情
だ」

【詩桜】
「私には弟などいないが、姉弟……というのも違う
気がする」

【詩桜】
「これはきっと、可愛い後輩で遊んでいる感覚だ
な」

【詩桜】

「母性は包みこむような愛情、姉弟であれば庇護欲のよつなものだろ？」「

【詩桜】
「今私は、君に構って、面倒を見てやりたいんだ」

【詩桜】
「だからこうして頭を撫でないと、愛しいというより楽しい」

【詩桜】
「私に悪戯をされる君が、動搖しつつもそれが心地よくなついたら嬉しいんだ」

【詩桜】
「なんなら私に飼われてしまつといい、愛情をもつて一生面倒を見るよ」

【詩桜】
「もっとも、それでも私に、本心からは飼いならされない君との関係が面白くもある……」

【詩桜】
「相手が母親であれば、飼いならされるのに抵抗もないだろ？」

【詩桜】
「私相手にはどこかまだ少し生意氣だ、そんな君と甘いじやれ合いでをするのが楽しいんだ」

【詩桜】
「私は君のひとつ年に生まれてよかつたと思つているよ」

【詩桜】
「たつた一年早く生まれただけで、特に理由もなく偉そつにできるからな」

【詩桜】

「君も年下にからかわれてはプライドに触るだらう、私はこうして甘やかしつつからかっても許される空氣だ。役得というやつだな」

【詩桜】

「さー、それじゃあもう少し君をイジるのを楽しませてくれ」

【詩桜】

「我慢ができなくなったら責任はとる、私にくすぐられて我慢する君の顔が見たいんだ」

【詩桜】

「れろ、れろつ、れろお……れろつ、れろつ、れろ……」

【詩桜】

「あ……そんなに可愛い反応をしないでくれ」

【詩桜】

「耳掃除をしている筈が、別の欲求が混ざってしまふだろ?」

【詩桜】

「こんな風に……もっと奥の方まで……」

【詩桜】

「れろお、れろつ、れろ……れろ、れろつ、れろお……」

【詩桜】

「ふう……他人の……いや、君だからだな」

【詩桜】

「恋人の耳をいじるのは楽しい、癖になりそうだ」

【詩桜】

「癖になつたら、君は私の楽しみのために、何時間でも耳を舐めさせてくれるのかな?」「

【詩桜】

「私は君を好きに扱つてみたいし、そんな私を君も好き勝手に扱つてみたいだろう」

【詩桜】

「また、私も君から好きに扱わみたい欲があるし、今こうして耳をいじられている君を見る限り、私が好きに扱われてみたい欲もあるようだ」

【詩桜】

「相違相愛でありながら挑戦的な私たちの関係、いいじゃないか」

【詩桜】

「恋人になつても、付きあう前と同様、お互い馴れあわずにいたいものだな」

【詩桜】

「まあ、挑戦的なのは性事情に関してのみで、普段の私は君を可愛がつてやるつもりだが」

【詩桜】

「さて、コーヒーを飲もうか？」

03 しおから

【詩桜】

「さて今日は、君を、私の好きにさせてくれる約束
だつたな」

【詩桜】

「先日の耳掃除の際に話した通り、私と君は相思相
愛でありつつも、馴れ合いを好まない挑戦的な関
係だからな」

【詩桜】

「君が私に貸しを作ってしまった以上は、私の好き
に扱われるのは仕方のないことだ」

【詩桜】

「ん？ ああ、貸しについては気にしなくていい
い」

【詩桜】

「このまま借りを返さず、永久に私の貸しにして
『君を好きに扱う権』を保持しておきたいまであ
る」

【詩桜】

「どうか君に貸しを作るタイミングを窺つて、今
か今かと目を光らせていたからな」

【詩桜】

「それを悟られては、君が私に頼らないだろうか
ら、下心を悟られないよう親切を装うのは苦労し
たぞ……」

【詩桜】

「あっすでに作った貸し借りを無しにはできない
ぞ、他のもので返したりも認めないからな」

【詩桜】

「私は今から君を好きにすると決めたんだ、事ここ
に至った以上は逃さないぞ」

【詩桜】 「ん……私が楽しそうに見えるのかな」

「まあ私も男性との付き合いは初めてだからな、君の前では理性的な女性でいたいと思う反面、年相応に浮かれてみたい気持ちは常にある」「今回に関しては、年相応どいろか、大いに羽目を外している己も自覚しているが……性に関しても、楽しんで行おうじやあないか」

「恋人同士の當み一つとっても、」「ういった駆け引きが生じるのは大好物だ、フフフ」

【詩桜】 「さて、こうして焦らすのも楽しみの一つではあるが、輪ゴムを引っぱるのにはこのくらいにして……さ、おいで」

【詩桜】 「何をするかつて？ 私の膝の上へ頭をのせるんだ、君が」

【詩桜】 「まあこれだけでは、普段と変わらないように思えるだろうな……」「つそういう不安そうな顔をするな、君の不安を上回る恥ずかしい行為をするつもりだ」

【詩桜】 「そして私の企みを読もうと不安がる君も可愛いな……ああそんなに脅えた顔を見せないでくれ、計画を全て白紙に戻して襲いたくなつてしまふ……」

【詩桜】

「でも今日は存分に君を可愛がつてやりたいんだ、さあおいで」

【詩桜】

「ちなみに君が躊躇つて時間を引き伸ばせば引き伸ばしただけ、私もこのあとで君が一番気持ちいい瞬間を焦らして焦らして泣いて哀れに懇願するまで焦らす。そういうのがお好みであれば、膝枕を引き伸ばしてもいいが」

【詩桜】

「さらに今日このまま膝枕せずに終わった場合は、君が今日の事を忘れるまで何食わぬ顔をして過る」
し、頃合いを見て、甘い甘い会話の末の恋人の営みをする際に、ねちっこく奉仕して、これでもかと言わんばかりに最高の快楽を味わわせて、けれど一番気持ちいい瞬間だけはお預けにして終わらせる」

【詩桜】

「その時ばかりはどれだけ必死に懇願しようとも力せずに終わらせる」

【詩桜】

「一番気持ちよくて、物足りない」ところで、終わらせる

【詩桜】

「うん、私の本気度が伝わってくれたよう嬉しい」

【詩桜】

「素直に膝へ頭をのせるのが一番だ」

【詩桜】

「今日はただ気持ちいいことをするだけだからな、フフ……」

【詩桜】

「ううして頭を撫でていると、何もせずに、優しく可愛がってやりたい気持ちもあるが……」んな機会は滅多にないからな、今日は私の趣味を優先させてもいいわ

【詩桜】

「これほど興奮している自分にはなかなか覚えがないからな……私は自分の想像以上に性欲の強い女だったようだ」

【詩桜】

「いや、君だからかな……君との数々の行為で、私の性的嗜好はかなり歪まされた。その責任を払つてもらおう……」

【詩桜】

「フフ、君の耳は私の好みの形をしているな……」
の耳が私は好きだよ

【詩桜】

「先日の耳掃除以来、私は君の耳をいじるのが好きなんだ……」うして指でなぞつて……フフ、気持ちいいか?」

【詩桜】

「耳の複雑な形が、これほどいじり甲斐のあるものとは……耳輪の柔らかさはたまらないな……」

【詩桜】

「対珠のコリコリ感もたまらない……人差し指で何度も搔いてやるのが楽しい……耳珠をつまんでいふときなど、もうこの耳を持つて返りたくなるほどだ……おっと、怖がらせてしまったな」

「詫び代わり……と言つてはなんだが、耳を舐めて気持ちよくしてやるわ……れろっ」

【詩桜】

「れろつ、れろ、れろお……れろつ、れろ……」

【詩桜】

「はあ……外側だけでは物足りないだらう……奥まで舌を挿しこんでやるからな……れろお」

【詩桜】

「れろつ、はあつ、はあ……れろ、れろつ、れろお……れろつ、れろつ」

【詩桜】

「はあつ、はあ……楽しい……君も感じていいんだ ろう?」

【詩桜】

「もどかしさついに身体を震わせている君に興奮するんだ……今日はその様をよく堪能させてもいい」

【詩桜】

「要は、快感に震えるもどかしくて仕方ない君を楽しみたいと、今日の趣向はそういうことだ」

【詩桜】

「もちろん、もどかしいままおあずけなんてことはなく、最後には最高の気持ちみなみを提供するつもりでいる」

【詩桜】

「ほら、もう我慢できないんだろう?…?」

【詩桜】

「ベルトを外すぞ……君は何もしなくていい、私に任せている……手が寂しければ、そうだな……私の足でも撫でているといい」

【詩桜】

「ああ、腰だけは浮かさせてくれ……取りだすのにズボンと下着を脱がせなくてはならないからな……」

「…」

【詩桜】

「ははっ、下着に引っかかつて脱げない……そんなに大きくなっているのか、よつ……と」

【詩桜】

「はは、耳を舐めただけでこんなに大きくなるとは……すっ、すまない、私はいま興奮して……君を悦ばせたくて仕方なくなっている……！」

【詩桜】

「耳もいいが、やはり、ここも可愛いな……少し撫でるぞ……」の筋を撫でるのがいいんだろう……？ 耳を舐めながら……」

【詩桜】

「れる……れる、れるつ、れる……はあ……はは、ここがびくびく震えて……出したいのか……？ まだ駄目だ……れるつ、れる……はつ、はあ……この根本を触られるのも好きだったな……ほら……フフ、気持ちいいところをびくびく震わせて……れる、れるつ……可愛いな、はあ……」

【詩桜】

「さて、もっと気持ちよくしてやりたいが……今日は、フフ……」は自分の手でしゃいてもらおう

……

【詩桜】

「男の子は一人でするものなんだろう？ それを私の前でしてみせて欲しいと言っている……」

【詩桜】

「私がするのは愛撫だけだ……ああ、最後には私の手でも口でも足でも、身体の好きな部所を使ってイカせてやる……」

【詩桜】

「これだけ私が手抜きをしていると恥われるかな……むしろ逆なんだ」「

【詩桜】

「私の両手と舌を使つて、君の身体のあらゆるところを愛撫してやりたい……」

【詩桜】

「私に3本爪の手があればいいんだが、角度的に手が届かない場合もあるからな……君に愛撫を施しつつ、ここは射精寸前の最高の状態で準備していくもらいたい……」

【詩桜】

「私のことは、君の快樂を高める人形だとでも思えぱいい……私の手も口も足も、君が気持ちよくなるための道具だ」

【詩桜】

「私は私で君を見て楽しませてもらひつつ……でも、私の前でしてみせてくれ」

【詩桜】

「ん、どうした？ 恥ずかしいのか？ 気持ちはよくなりたいだろ？」「

【詩桜】

「ほら、扱くんだ」

【詩桜】

「自分で扱かないと、こんなに気持ちいい」としてもうかるのに、イクことさせないぞ……？」「

【詩桜】

「内腿を撫でてやろ？……」「を撫でられる」ならば、君が足フェチなお嬢で私もよく知つているからな……」「

【詩桜】

「ここ」を指でなぞられるどゾクゾクするだらう?」「

【詩桜】

「股間に近づくにつれて……もつと気持ちよくなるぞ? ほら抜け」

【詩桜】

「頑張って抜けば最後にいいことあるぞ?」

【詩桜】

「自分で抜きながら私の口の中へ出せるんだ」

【詩桜】

「二人で手を重ねあって一緒に抜いてイクのもいいな」

【詩桜】

「君がお望みながら最後は私の足で挟んでやるので

もいい」

【詩桜】
「ほら抜け……両耳をいじりながら君とキスをしつつ射精を高めるには、君自身に抜いてもらうしかないんだ」

「耳を舐めてやるから抜け……れるつ、れる、れろつ……れる、ちゅつ、れる、れるお……」

【詩桜】

「それとも乳首の方がいいか? ほら手がシャツの中へ入つていくぞ?」

【詩桜】

「ほら捕まえた……男の子が乳首をいじられたときに、どんな声を出してみせるのか知りたいな?」

【詩桜】
「なあにここには私しかないのだから、恥ずかしがることはない」

【詩桜】

「気持ちよくなりたいだけの自分を曝け出してみる、きっと我を忘れた方が気持ちよくなれる……ほら」

【詩桜】

「うおつー。」

【詩桜】

「……おおつと、想像以上の反応だったな……男の子も乳首をじじりされると気持ちいいんだな、可愛いほら、ちいわ」

【詩桜】

「なに? 気持ちいいよりくすぐったいに近い? いい」とじゃないか、もどかしければもどかしいだけい」

【詩桜】

「ほら、乳首をじじりつつ……耳舐めだ、れろつ」

【詩桜】

「気持ちいいんだろ? やっぱり君の先からぬるぬるしたものが少し漏れただよ……ああ、興奮する」

【詩桜】

「男の子は気持ちいいとすぐに出てしまつからわからやすくていいな、ふぶつ」

【詩桜】

「あんまり可愛いからキスをしようが……んむつ」

【詩桜】

「んむ、ちゅう、んむつ……れろつ、れろ、れろつ……はあつ……」

【詩桜】

「ふふ、キスをしながら耳も乳首も舐められるよう、舌が3本あればいいんだが」

【詩桜】

「まあそこは、つばをつけて手でいじるから許してやつてくれ」

【詩桜】

「ほりぬるぬるの指で乳首をいじられるのは……ふふ、可愛い。最高の反応だ」

【詩桜】

「ああ駄目だ、たまらなくなってきた。私が君に舐められたいくらいだ」

【詩桜】

「ちゅう、んちゅ、ちゅう、れろ、ちゅう、れろお……ちゅう、んむ、ちゅう、れろ、んむう……ちゅう、れろ、んむう……んつ?」「..

【詩桜】

「ふつ、ははつ……ようやく扱きはじめてくれた……乳首と耳が気持ちよかつたのか?」

【詩桜】

「それとも愛情を込めてキスしたのがよかつたのかな……」

【詩桜】

「じゃあ次は乳首を舐めてやるう……はあつ、君の乳首、大きくなつているじゃないか……」「ふなんに充血して……れる」

【詩桜】

「ちゅう、ちゅう、れろ、ちゅう、れろ、れろお……れろ、ちゅう、れろ」「..

【詩桜】

「私に乳首を舐められながら扱くおちんちんはどうだ? 今までにない気持ち良さなんじゃないか?」

【詩桜】

「ああ……」の硬い脇腹を撫でるのも楽しい……お
へそも舐めてやる……れろつ！」

【詩桜】

「れろ、れろつ……れろつ、はは、この位置は、君
の扱く手が見られていい……顔が見られないのだけ
は残念だが」

【詩桜】
「もっと必死に擦るといい、ほらほら、扱け、扱
け！」

【詩桜】
「ああ、たまらないな……すまないな、膝枕は「こ」
で終わりだ……代わりに、私の腿で君の顔を挟ん
でやる」

【詩桜】
「私は……君の内腿を舐めたいんだ」

【詩桜】
「れろつ、れろ、れろお……れろ、ふうつ、んつ、
れろつ……れろ、れろつ……」

【詩桜】
「はは、君も私の足を舐めているだろつ……お互い
の足を舐めあうのも悪くないな……れろつ、れ
ろお……」

【詩桜】
「あつ、馬鹿……そこは舐めるな、趣旨が違う……

んつ」

【詩桜】
「私は愛撫される側ではなく、君を一方的に愛撫し
ていたいんだ……んんつ！」

【詩桜】

「くつ、今回の當みにおける、君を愛撫して楽しもうというコンセプトが台無しじゃないか……不用意に君の上へまたがった私も悪いが……」

【詩桜】

「そういう人の樂しみを邪魔する悪い男の子は……精液のいっぱい入った袋を舐めてお仕置きだ……あむっ」

【詩桜】

「れるつ、れる、あむつ……れる、ちゅつ、んむつ……んむ、ちゅうつ……ちゅつ、れるつ、んむう……」

【詩桜】

「はは、やはり反応がいいな……れるつ、んむ、ちゅつ、んむちゅうつ……ちゅつ、れるつ、んむつ、ちゅつ、ちゅうつ」

【詩桜】

「はあつ、毛が邪魔だな……いすれ剃つてしまふか……れるつ、ちゅつ、れるお……れるつ、ちゅつ、れるつ、んむちゅつ……」

【詩桜】

「んむ、このままでは君が扱くにくそうだな……君の下半身側へ回りたいが、そうなると、君を足で挟めなくなる……それは君も寂しいだろう……」

【詩桜】

「となると……君、身体は柔らかい方だったか？
引つくり消して抱えこむぞ……よつと」

【詩桜】

「フフ、なかなかに凄い格好だな……」「ういう体勢をなんと言ったか……私は仕事柄見慣れない単語はすぐ調べるようにしているんだが、『うい』た言葉には中々縁がないだな……そう、ちんぐり返しと書いたか、凄い言葉だな」

【詩桜】

「少し苦しくて、扱きにくいかもしないが……絶対気持ちよくしてやるから、私を信じて手を止めるとな」

【詩桜】

「……」はせひ愛撫してやりたかったからな……フフ、少し抜げるぞ……

【詩桜】

「何をされるかわかつてしまつたようだが、この体制では抵抗もできないだろうフフフ」

【詩桜】

「じゃあ君のお尻の穴……舐めるぞ、れろつ

【詩桜】

「れろつ、れろ、れろ……れろつ、れろお……れろ、れろつ……ふふ、いい反応するじゃないか……」

……

【詩桜】

「私の足に挟まれつつ、お尻の穴を愛撫されながら扱けるんだ、最高だらう……？」

【詩桜】

「もうちょっと奥まで舌を挿れたいな……少し挿しむだ、れろお……れろつ、れろ、れろつ……」

【詩桜】

「れる、れるつ、れる、れろお……れる、れるつ、
れる、れろお……はあつ、はつ……君の顔が見ら
れないのだけが残念だ……れるつ、ちゅつ」

【詩桜】

「ん、イキやうか？ イキやつなんだな？」

【詩桜】

「わかった、ここの態勢なら……口がいいな、咥えて
やる」

【詩桜】

「君はそのまま手を動かし続ければいい……ずっと
吸い続けてやるから、好きに口に出せ出で……あ
むつ」

【詩桜】

「ちゅうつ、ちゅつ、ちゅうつ……れろつ、れろれ
ろ、ちゅつ、れろつ、ちゅうつ……ひづりもひづり……ちゅうつ、
ちゅうつ……」

【詩桜】

「はつ、はつ……私の口を、君が気持ちいいもの
を吐き出すための穴だと想つて……遠慮なく絞り
だしていいつ……！」

【詩桜】

「ひづりもひづり……ちゅうつもひづり……
うつ……」

【詩桜】

「んんつ……んぶつ、んんんんんとつ……ん
ちゅうつ……ひづりもひづり……むつ、ちゅうつ……

【詩桜】

「んつ、ひづり……んむ、ちゅうつ……、
ひづり……」

【詩桜】

「はあっ、はつ、はあっ……ふう……私の口から溢れるぐらいい、いっぱい出したな……少し漏れてしまつた……んぐっ、『ぐん……』」

【詩桜】

「ああ、いや……満足したのなら、いい……私自身、興奮していたのもあるが……君に、君一人では味わえない快感で悦んでほしかった」

【詩桜】
【詩桜】理由？ 私が君の年上の恋人だから以外にあるか？」

【詩桜】
【詩桜】「後輩というものは面倒を見たくなるものなんだよ、愛しい恋人なのだから尚さらだ」

【詩桜】
【詩桜】「まあ、あと……純粹に可愛かったのもある、君がな」

「男性に可愛いと言うのはあまり良くないらしいが……私はどうしても君をお気に入り扱いしてしまう、許してくれ」

【詩桜】
【詩桜】「ああ、太ももで挟んだままでは喋りにくかつたな……それも、下に敷いて」

【詩桜】
【詩桜】「すまなかつたな……ん？ 私の顔が見られない？ はは、最高の反応だ」

【詩桜】
【詩桜】「今さら恥ずかしからなくていい……私の前では君の全てを見せてくれ」

【詩桜】

「同級生や年下の恋人相手では出せない君の顔を見せてもらわなくては……恋人が私でなくてはいけない理由を一つひとつ増やしていきたい」「

【詩桜】

「というわけで、他人には恥ずかしくて求められない性的嗜好があれば言ってくれ」

【詩桜】

「お尻の穴まで舐めたんだ、もう照れる」となどないだろう……また可愛がつてやる

【詩桜】

「私なしでは生きられなくなるよ」

04 悶

【詩桜】

「さて今日は、私が、君の好きに扱われる約束だつたな……」

【詩桜】

「私としたことが、君に借りを作つてしまつとはな……その返済に、私を好きにしたいと言われては、不本意ではあるが従わざるをえない……」

【詩桜】

「先日、私が貸しを作つた時は、私の好き勝手にさせてもらつたからな……自分はしたいようにするが、自分が同じことをされるのは御免」うむ……というわけにはいかないだろう」

【詩桜】

「とは言つても、私は君から好きに扱われるのはむしろ臨むところだ」

【詩桜】

「したいようにすればいい……まあ好きしろ、抵抗などしないとは言つても、人間の反射としてごく普通に起こり得る動きはしてしまうかも知れないが……興奮のあまり、ついうつかり手が出てしまつたり……フフフ」

【詩桜】

「あつ待て！　また、また縛る気か！　いや別に嫌じゃあないが……わつ、私にだつて、一応の羞恥や恐怖はあるからな！？」

【詩桜】

「うつ、くつ……ま、まあ、迂闊にも、後先を考えず君に頼み事をしてしまつたのは私だ……それも、それなりの面倒をかける形で……」

【詩桜】 「だからまあ、できる範囲での要求には応えよつ……

…繰り返すが「できる範囲で」な

「あー！ 」う、いきなり腋を……！ 私がくすぐりに弱いのは、わかっているだろうに……いや待て、ちょっと……いきなりか！？」

【詩桜】 「ひうつ！ あつ、やあああつ……！」れ、はつ

「ひうっ！ あつ、やあああつ……！」れ、はつ
……私の「できる範囲」を超えているのでは…
……くすぐりを我慢できる人間など、そうはい
ないだろう……！」

【詩櫻】
「やめつ、ひやつ！ ひふつ、はつ、ひやふツ…」

【詩桜】
「くつ、抵抗できない人間、それも女性相手によく
もやる……！」

【詩桜】
だが私も少し学んだんだ、脇に力を入れて引き締

だが私も少し学んだんだ、脇に力を入れて引き締めれば、くすぐられても多少は耐えられるようになる……そしてしばらく耐えれば、感覚が麻痺して、大してくすぐったくなくなるんだ」

【詩桜】 「あつ、やめつ……」 足の裏を舐めるな、そ」「は

「あつ、やめつ……！ 足の裏を舐めるな、そこは力を入れられない……！ ひツ、やつ……！ そこのは駄目、だ……！」

「はあ、はつ……くすぐりは、本当に耐えられないから、抵抗できない時はやめよう……やめないか？ いや別に気持ちよくは……」

詩桜

【詩桜】

「あッ、んつ、ぶう……んつ！ あッ、やあッ、あッ、ああッ……やめッ……」

【詩桜】

「足の裏、舐められたあとは、なんだか身体がおかしいんだ……全身が性感帯になつたかのようなんだから待て……ひんツ！」

【詩桜】

「あッ、やめ……そ」……は、やめろ……いやだから、そこ……なんだ、繰り返し聞いて……私の口からはつきり言わせたいのか？ 君も大概ヘンタイだな……」「

【詩桜】

「クリは、いま敏感だからやめる……あッ、んツ……！ くッ、そこを重点的に……んツ、あッ……はあッ……」

【詩桜】

「も、もういい、好きにしろ……そもそも、君から好きに扱われるのは、私の望むとこだ……」

【詩桜】
「可愛がっている君が奉仕してくれるといつのだから、喜ぶべきだな……そうだ、ドミの君が喜びそうな言葉をかけてやろう。まあ、お舐め

【詩桜】

「女王様気分で舐めさせたりすると思えれば、気分もよくなってきた。なんならあとで踏んでやろうか……？」

【詩桜】

「あッ、ちょっと、どこを拡げ……まま、待て待て、そつちはまだ……あッ、やめッ……尻の穴を、拡げるなあッ……！」

【詩桜】

「んツ、ぶツツ……はあつ、やめ……あツ、はあつ
……うつ、んツ……ん、ふう……」

【詩桜】

「はあつ、はあ……き、君に、身体を開発されると
は思わなかつた……いや、さすがに抵抗はある…
…」

【詩桜】

「せめてその、なんだ。君がしたいのなら、事前に
準備はしておいたんだが……」

【詩桜】

「あつ、やめ……だから、その君は……君に抵抗が
なければいいんだが……あつ、んんツ、ぶうつ…
…はあつ、あつ、やめ……力が抜ける……」

【詩桜】

「はあ……まさか君に、イジメられるとは思わな
かつたぞ……慣れてないからな、私だつて怖いだ
ろう……」

【詩桜】

「あツ、やつ！ やめ、クリをイジるな……なん
だ、気持ちの問題か……胸が、切なく……ん
ツ！」

【詩桜】

「ああツ、あつ、あつ、はあつ……あつ、ああツ、
そんな、ねちつこく……あツ、ああつ、んツ、
うつ……あつ、ああつ、んツ！」

【詩桜】

「はあツ、はあつ……くすぐりに弱い自覚はあつた
が……なんだ、私はクリも弱いのか……そんな執
拗にされると……んツ！ ああツ、気持ちが弱
く、なる……」

【詩桜】

「比較対象がないから、自分が特別弱いのか心配になつてくるなんんッ、あつ、だからと『』って、そこばかり……あッ、ああつ、脳がふやける……」

【詩桜】

「あッ、やめつ……！ なんでそ」「で、脇をくすぐる……舐め、るなあつ……」

【詩桜】

「ああッ、どうして脇でこんなに……あッ、ああつ、あつ、くっ、身体が……くねる……！ 自分が、こんな……君に、開発される、とは……」

【詩桜】

「君のせい……最近は、自分の脇が気になつてきただぞ……んッ、ノースリーブの服など着ようものなら、君に脇を触れられるんじやないかと……」

【詩桜】

「君に本氣で脇を責められたら……街中でも抵抗できなくなつてしまいだからな……んッ」

【詩桜】

「あつ、だから脇を責める、な……んッ！ あッ、ああッ、やつ、君は、なかなかいやらしい性格だな、私の……弱点ばかり……んッ！」

【詩桜】

「ひああうつ！ あつ、やつ、あああつ、やつ！ やめつ、あつ、ああつ、首筋、まで……ああつ、私の身体が、こんな、敏感に……」

【詩桜】

「あああああ！ 耳、だめ、だつ……ああ、やめつ、今、舌挿れられたら……ひやうつ！ ああッ、あつ、やめ、堕ち、る……ああ、あツ、やう……」

【詩桜】

「はあつ、はつ、全身が熱い……少し、怖いが……自分の新しい部分が見つかっていくのは……恐怖とはまた別に、興奮もするな……」

【詩桜】

「興味はあったが、自分がこれほど、性行為にのめり込むとは思わなかつた……自分はもつと淡々としているものだと思いこんでいたが、その根拠のない自信を打ち砕かれたよ……フフ……」

【詩桜】

「自分を開発していく相手が、よりにもよつて、可愛がっている後輩というのが皮肉だな……君に可愛がられてしまうとは……」

【詩桜】

「まあ、かくいう私も、君を開発するの好きだしな……いつか乳首だけで君を満足させてみせる……甘えて許しを懇願する君の声を聞いてみたいフフ……」

「……」

【詩桜】

「あついや、だからと言って、私の乳首を責めてほしいわけではなくてだな！？ あつ馬鹿、やめ……んつ！ ああつ、あつ、あつ……」

【詩桜】

「こらつ、人の胸で遊ぶな……ああツ、あつ、乳首をつまんで持ちあげるな……たぶたぶするな！」

【詩桜】

「君は人の胸をゴム毬かなにかだと思つてないか……んッ、くう、はつ、んんッ……」「

【詩桜】

「あつ待て待て、乳首をいじりながら脇舐めは……やめえつ……！ あつ、くぶう……んつ、あツ、はあつ……んつ、ダメえ……！」

【詩桜】

「はつー、いや、なんでもないなんでもない、馬鹿違う、甘えた声など出していいない」

【詩桜】

「今のはあれだ……君の気づかない部分で、虫が私の鼻に入ってきたんだな……つまり、いま甘えた声を出したのは君に対してではなく、虫に対して……」

【詩桜】

「あつ、やめえ、あつー、ああひ、乳首と脇を同時に責めるのはやめろ……あつ、ああツ、ダメえ！ あつ、ああつ、やあんつー！」

【詩桜】

「あつ、ああつ、溶ける……自分が自分でなくなりそうで怖い……あつ、あふツ、んつ、ああつ……ひあつ、あつ、ああツ、くすぐったさが……ああ……快感、に……」「

【詩桜】

「ああツ、はつ、ああつ、やめつ、ああつ、「の、ままだと……ああつ、直接触られてないのに、イク……ああつ」「

【詩桜】

「あつ馬鹿、いまクリをいじられたら……ああッ、あッ、ああッ、ばか、イク、ああッ、あッ、わた
し、がつ、前に噴いたのは見ているだろう……」

【詩桜】

「ああッ、やめろッ、あつ、クリッ、つまむな……
こするなあ！ あつ、無理だつ、あつ、やめッ、
ああッ、ダメえ！」

【詩桜】

「あつ、イクッ！ あああああ！ あああああ
ああーーー！」

【詩桜】

「ああッ、あつ、ああ……はッ、ああ……は
あつ、イツ、て……しまつた……また、潮を噴い
て……なにが『潮先輩だけに』だ、うるさい……
…」

【詩桜】

「はあつ、このイク感覚もだいぶ覚え」まされたが
……慣れはしないものだな、未だに噴ぐ瞬間は少
し怖い……別のものが漏れでてしまふ怖さもある
しな……君、そういう趣味はないよな……？」「

【詩桜】

「それは、それとして……私の果てる姿を見て、君
は充分に興奮したんだろう？」

【詩桜】

「私をイカせただけでは、君が満足してないだろ
う？ イツたばかりの私が言うのもなんだが……
私も今、君をがむしゃらに感じたい……君を私の
身体の中を感じたい」

【詩桜】

「私からは抱きしめられないからな……まあ、手をほどかれたら普通に逆襲するしな……だからまあ、この胸の中へ顔をうずめて……身体を密着させて、思い切り突いてくれ……」

【詩桜】

「んッ！　んんッ、んッ、あッ、うんッ……！　あッ、はあッ……！　入って、きた……！」

【詩桜】

「自分の身体ながら、君を普段より締めつけているのがわかる……んッ、イツたばかりだから、身体が弛緩しているものかと思いまや……やつ、よみほど、君に挿れてほしかったのかな……」

【詩桜】

「あッ、くうッ、んッ、ああッ……やつ、こすれ、合いつが、中で感じられて……んッ！　いつもより君を感じる……んッ！」

【詩桜】

「はあッ、あッ、やつ、脇舐め、ダメえッ……！　ああッ、あッ、くつ、こなんときまで私の弱点を……んッ、いや、いい……そのまゝが、やつ、私も夢中になれる……」

【詩桜】

「あとは……ああッ、やつ、キス、しようがんッ！　繋がつていてるときにキスをするのは、好きなんだ……はつ、ああッ、んッ……！」

【詩桜】

「んッ、ちゅッ、ちゅうッ、れろッ、はあッ、はうッ、んッ、ちゅ、ちゅうッ……ちゅう、れろッ、んうッ、はあッ、んッ……！」

【詩桜】

「あっ、ああっ、これ、また、イク……イッたばかり、なのに、もう……んッ！ はあっ、私は、よほど興奮して……あッ、ああっ！」

【詩桜】

「ははッ、私は、君にイジメられるのが、好きなのかもな……可愛がっている後輩から、「うして逆に、可愛がられるのが……より被虐心を煽られる……」

【詩桜】

「あッ、はあッ、あッ、ああッ、あッ、んッ……あッ、くうッ……イクッ、んッ、ああッ、あッ、ああッ、これはっ、もうっ……ああッ、最後は、キスして……んッ…」

【詩桜】

「ふあッ、あああああああああーっ！ ああッ、あッ、また、噴くつ……！ ああッ、あッ、あああッ！ やああああああッ！」

【詩桜】

「んむっ、ちゅっ、ちゅうっ……ちゅっ、はあッ、あッ、ちゅっ、んむっ、んむう……ちゅっ、んむう……はッ、ああッ、あッ、はあッ……」

【詩桜】

「イキながらキスをするの、気持ちいいな……きちんと私のお願ひを聞いてくれたのもポイント高いぞ……君は、ビリだ……？ 満足できたか……？」

【詩桜】

「あ…………」んな短時間で、2回も噴いてしまうとは……まさか、噴きやすい体质なのか、私は……？　身体が癖になつてなければいいんだが……」

【詩桜】

「いひ、いや、当然、嫌……ではないかも知れないが、困るには困るだろう、こんなに噴かされればかりでは……君からいいようにしてやられる……」

【詩桜】

「まあ、私は、自分の中にMの心があるのも理解した……君にイジメられるのは嫌いじゃない……」

【詩桜】

「だが最高のMは最高のSを兼ねると聞くな……？　私は、君にイジメられるから」」や、遠慮なく君をイジメられるというものの……Mの心を知ったからこそ、限界というものもわかるしな……」

【詩桜】

「なんだ？　まだ私をイジメたいという言うのか？　いいだろう、今日は好きにすればいい、借りを作ったのは私だしな……」

【詩桜】

「しかし、今日徹底的にイジメられれば、次のときに3倍返しで君をイジメてあげられるな……？」

【詩桜】
「君にイジメられていると、その時を思い浮かべて興奮するんだ。この屈辱を君に味わわせたら、さぞ楽しいだろうなど……」

【詩桜】

「ん？ 何もしないのか？ どうせ手遅れなんだから、いま好きにしておいた方がいいぞ？ 次に私が主導権を握った時は何の躊躇いもなく、君を可愛がり抜いてやるからな……」

【詩桜】

「君が私の弱点を掴んでいるように、私も、どうすれば君を鳴かせてやれるかよく知っている」

【詩桜】

「今日は2回噴かせられたな……3倍返しかから、君が私に貸しを作ったときは6回イカされるのか……今からそのときが楽しみだ」

【詩桜】

「この間、男性の潮吹きについて研究したんだ。空っぽにした上でさらなる絶頂を迎えてやると、透明な潮を噴くらしい。絶対に、手加減も容赦も、しない」

【詩桜】

「これだから君にイジメられるのは好きなんだ……さ、もっと私をイジメてくれ。お互いに馴れ合いは好まない、それが私と君の関係だらう？」

【詩桜】

「ははっ、君が優位の状態なのに、そんな齧えた顔を見せないでくれ……今すぐ可愛がりたくなってしまう」

【詩桜】

「これからも、お互いにお互いの知らない自分を開発し合っていこう……愛しているよ、フフフ」

05 ころころ

【詩桜】

「…………もう寝てしまったかな」

【詩桜】 「最近の君は、よくやっている」

【詩桜】 「疲れているだろうに、またしても行為が過激になってしまった……などと反省はするんだが、私はいつも」「うだ」「いつも」「うだ」

【詩桜】 「反省どころか、回数を重ねる」と、「よりマニアックな方向へ進んでいる気がする」

【詩桜】 「すまない…………と私が謝るのを君は嫌がったな」

【詩桜】 「気の毒と言えばいいだろうか、君は普通に愛しあうだけで充分なのだろうが、私はつい刺激を求めてしまつ」

【詩桜】 「君はどちらかと言えば、正常な側の人間だつたと思ふんだ」

【詩桜】 「それがこうして、愛の営みさえ真っ當に行えず、君を少し氣の毒に思つている」

【詩桜】 「世間の恋人のように……私はそれを『おそらく』でしか知らないが、勝ち負けや貸し借りなどのない性行為が普通なのだろうな」

【詩桜】 「そんな普通さえできない私は、君の恋人として、他の女性たちよりも劣っているのだろうと、特に行為のあとはそう思う」

【詩桜】

「落ちこんでいるわけでも、ましてや、君の恋人で
ある」とを否定しようだなんてつもりはないん
だ

【詩桜】

「ただ、普通よりも劣っている私に、君はよく付き
あつてくれている……と、愛しさを覚える」

【詩桜】

「私の恋愛は大変だらう?」

【詩桜】

「きっと今後も、誰もが憧れるような、手を握りな
がら街中を歩き、晴れた公園のベンチで休憩をと
りながら、お互いの幸福を確かめあって微笑みあ
う……ような恋愛は、私にとつて難しいかもしれ
ない」

【詩桜】

「それでも君は、困った顔をする」とはあっても、
嫌な顔ひとつせずに、私を好きだと言つてくれる」

【詩桜】

「よくなついてくれる後輩とは可愛いものだ」

【詩桜】

「他の女性の名前を出されては困るだらうが、君が
錦さんを大切に扱っていた気持ちがよくわかる」

【詩桜】

「恋人の後輩とはこれほど愛しいものかと、今実感
している」

【詩桜】

「年下はいいぞ」

【詩桜】

「もっとも私は君を離すつもりなどないから、君は生涯、年上の恋人しか知らずにかわいそだな」

【詩桜】
「その分、たんと甘えさせてやるわ」

「これからも君を困らせてやるから……その度に可愛らしい顔をして、私に愛しい想いをさせてくれ」

【詩桜】
「フフ、寝ているようだ、全部聞いているのもわかつているぞ」

【詩桜】
「時間が来れば起こしてやるから、自分勝手な先輩のおしゃべりになど付きあわず、今度こそ眠ってしまうとい」

【詩桜】
「愛しているよ、おやすみ」

06 鎌倉夜戦

【詩桜】 「すう——ふう——」

【詩桜】 「ふう……んつ、すう——」

【詩桜】 「ん……んん、ん……」

【詩桜】 「すう……君を、連れて……んん……根室……アリ
ユーシヤン列島……そして北極へ……すう——
」

07鎌倉の朝駆け

【詩桜】 「やあ、おはよう」

【詩桜】 「随分と驚いた顔をするじゃないか」

【詩桜】 「愛しの妹の優しい声で目覚める筈が、情け容赦など一切ない恋人の声で起こされれば、そんな表情にもなるか」

【詩桜】 「ひよりんは1時間前に出ていった」

【詩桜】 「どうやら事務所の友人が食中毒で入院したらしい」

【詩桜】 「マネージャーから連絡を受けて、すぐ駆けつけに行つたようだ」

【詩桜】 「昼間から夕方にかけては仕事だから、早朝にしか見舞いに行けないのだろうな」

【詩桜】 「忙しい身でありながら、友人の危機とあらば迷いもせず病院へ急行するとは……ひよりんはただでさえいい子なのに友人想いでもあるんだな」

【詩桜】 「改めて惚れ直した、君と入籍して彼女を妹にできる日が楽しみだ」

【詩桜】 「ああちなみに、事務所の友人の容態は落ち着いて、今は快方に向かっているらしい。喜ばしいことだ」

【詩桜】

「で、君を起^二してから行くか一瞬悩んだようだが、私が来られるのならと連絡てくれた」

【詩桜】

「並々ならぬ愛情をもつて君のお世話をしているひよりんが、私を信頼してその役を任せるとは……正直に言つて感動した」

【詩桜】

「私がそこまでひよりんの信頼を得られていたとはな……感動で目から愛液が漏れそうだ」

【詩桜】

「というわけで、今朝は私が起^二しきた」

【詩桜】

「君のことだ、まだ眠い、もう少し布団の中にいるせろと黙々を^一ねるんだろう?..」

【詩桜】

「君がそんな甘えた言葉を口にしたときのために、尻の中へ入れるバイブと、潤滑油にするためのローションを持ってきた」

【詩桜】

「さ、まだ布団の中で寝ていいぞ」

【詩桜】

「……なんだ、起きるのか

【詩桜】

「せっかくだらしない君を調教したくて、ウキウキしながら^二へ来たというのに……もう少し我儘を言ってくれてもいいんだぞ?..」

【詩桜】

「まあ力づくで躊躇^一するが

【詩桜】

「なんだ、本当に起きるのか……拍子抜けもいいところだな、それならこれほど早く駆けつける必要はなかった」

【詩桜】

「……だが、早くかけつけた分だけ、君が今から支度を済ませても、家を出なくてはいけない時間まで、まだ30分ほどの余裕がある」

【詩桜】

「ひよりんが大好きな私としては、彼女の信頼を裏切るわけにはいかないが……あと5……いや10分程度は君を起こすために設けておいた時間のバツファーと見なしていいだろ?」

【詩桜】

「少し、私の膝の上へ頭をのせないか?」

【詩桜】

「その方が君も目が覚めるだろ?、タイムキーパーは責任をもつて私が務める」

【詩桜】

「軽く頭を撫でてやるだけだ、それ以上の行為には及ばない……さ、おいで」

【詩桜】

「うして膝枕すれば、君がすぐ起床するのなら、毎朝起こすのを手伝ってもいいが……まあ、それはひよりんの役目か?」

【詩桜】

「それに私の恋人であれば、一度目が覚めたら周りに甘えたりはせず、きちんと起きられる筈だしな」

【詩桜】

「それでも、どうでも起きられないときは、『うやつて起』」そりが……」

【詩桜】
「んっ」

【詩桜】
「なんて、これは今日だけの特別だ」

【詩桜】
「また次の機会があれば、その時は酷い『うやつ』をさせ
てくれフフ」

【詩桜】
「そ、それじゃあ起きよつか」

【詩桜】
「おはよっ」

08街道をゆきまくり

【詩桜】 「日が暮れてきたな……」

「計算ではもう少し早く宿に着く予定だったんだが、まだ町の影も形も見えないとは……」のカーナビ、壊てるんじゃないかな？」

【詩桜】 「だいたい、こうなるのがわかつていたから、私は早く出発しようと言ったんだ。ここは少し走ればどこにでもコンビニのある大都会じゃないんだ、広大なる北の国だぞ」

【詩桜】 「あの時、君が三色海鮮丼とうにいくら丼で長々と悩むから……これが2月であれば詰んでいた」

【詩桜】 「なつ、違う！ 私はただ、君に牛を見せてやるうと……君だって牧場を見たときは、大はしゃぎしてアイスまで買っていたじゃないか……」

【詩桜】 「……いや、不毛な争いはやめよう。ともかく目的地まで辿りつかねば。満足に睡眠もとらずに明日も一日中運転をするのでは、いくら私でも体力に不安がある」

【詩桜】 「ああ、違う……嫌味に聞こえたのならすまない、この無茶な旅行に君を付きあわせたのは私だから。いくらいきあたりばつたりの旅行が好きだと言つても、目的地にまで辿りつけないのでちょっとな……」

【詩桜】 「よし、決めた。少し休憩しよう」

【詩桜】

「幸い、あそこに待避所がある。車を停めて、……いや30分ほど休憩しよう」

【詩桜】

「……」「して苛立つてしまつのが一番よくない」

【詩桜】

「実を言えば、少し眠気が漂いはじめていた」

【詩桜】

「必要があれば仮眠をとつて、頭をすつきりさせてから運転を再開しよう」

【詩桜】

「ふう――」

【詩桜】

「君と付きあつてから、それなりに経つ……これでも品性は保つていたつもりだったんだが、少しだらしない格好をしてもいいだろうか」

【詩桜】

「ああ、すまない……私としたことが疲労しているみたいだ」

【詩桜】

「だから、もし色氣のある行為を期待していたのなら悪かったな、それは宿へ着いてからだ」

【詩桜】

「はは、そこまで非常識ではないか……とはいえ、少し抱きしめてもらう程度は考えていたんだがな」

【詩桜】

「目を覚ましたいのもあるし……あとほ、些細な言い争いとはいえ、苛立つて君にあたつてしまつた」

【詩桜】

「抱きしめられて、仲直りしておきたかつたんだ」「ん、なんだ……」ちらの座席へ来るのか？」

【詩桜】

「いや、私が君の方へ行けばいいのか……なるほど、ハンドルの無い分、そちらの方がゆとりはある……」

【詩桜】

「とはいって、君の上へまたがれという」とだろう？
お姫様抱っこのようにして座るには、さすがに
スペースが狭いからな……」

【詩桜】

「君を膝の上へせるのは日常茶飯事だが、私が君の上へのるのは……抱えられるのは、珍しいな……あまり記憶はない」

【詩桜】

「だが、たまにはそれもいい……君の膝の上で抱かれてみたい」

【詩桜】

「ああ、はは、またいやらしい言い方をしてしまつた」

【詩桜】

「今の『抱かれたい』は『抱きしめられたい』の意味だ」

【詩桜】

「また期待させてしまつたら悪かつたな。繰り返しへなるが、君の期待には宿へ着いたら愈えるよ」

【詩桜】

「期待していなければ何もないが……フフ」

【詩桜】

「じゃあお邪魔する……ああ、正面からでいいんだよな?」

「はは、これは想像以上の密着度だな……それも、君の腰の上へまたがつて……君の前でこれだけ足を開くと、さすがに少し恥ずかしい」

【詩桜】
「ただ、頭を丸」と抱きかかえられるのはいい……君、私の運転中に、シートベルトの挟まつた胸を何度か見ていただろ?」

【詩桜】
「気づいていたとも……それを見せびらかすほど痴女ではないが、君をからかうネタにしようとは考えていた」

【詩桜】
「嫌な気分? 君が相手なら、するわけないだろ?『言えばこうして包んでやるのに』と考えていたくらじだ」

【詩桜】
「車の中でこれは中々に興奮するな……」

【詩桜】
「ありがとう、君の協力のお陰で完全に田は覚めたよ」

【詩桜】
「疲れもだいぶ……いやほとんど感じなくなつたし、これならあと2時間は気分良く運転できそうだ」

【詩桜】
「けど、まあ……せつかくだ、もう少し田覚ましに付きあつてもいいわ」

【詩桜】

「何度も言つて申し訳ないが、車の中であれやこれやはしないからな」

【詩桜】

「いくら周りに明かりがなくなつたとはいえ……私たちを隠すものが周りに何もないのではな」

【詩桜】

「車種が車種だけに、ドライバーはそれなりにいかつい男を想像するだろうから、絡んでくる輩はないだろ」と想定しているが

【詩桜】

「と言つても、そうだな……私の腰の下で、随分と期待は高まつてしまつてゐるようだし……」

【詩桜】

「んっ」

【詩桜】

「二のくらいはしようか」

【詩桜】

「ふふつ、せつかくの良いシチュエーションで、私も甘い気持ちになつていたのに、君の唇からは三色海鮮丼の味がした」

【詩桜】

「はは、冗談だ」

【詩桜】

「ちゃんとソフトクリームの甘い味がしたよ」

【詩桜】
「私の唇はどうだったかな……君のお口に合う味
だつただろうか」

【詩桜】
「さ、もう一度召し上がり」

【詩桜】

「ん、ちゅう……ん、むつ……んむ、ちゅう……んっ」

「はつ、はあつ……いけないな、軽いキスだけに留めておくつもりだったのに……君の舌がおいしそぎて、よく味わつてしまつた」

【詩桜】

「ちゅう、ちゅう、れろつ、ちゅう……れろ、ちゅう」「ちゅう」

【詩桜】

「もうそろそろ運転に戻つてもいい氣もするが……物足りなさを覚えてしもう」

【詩桜】

「最後までは駄目だ、最後までは絶対駄目なんだが……君の顔を撫でるくらいはいいだろうか……」

【詩桜】

「はあ、愛しい……あとで絶対に可愛がつてやるからな……」

【詩桜】

「今日の宿にも温泉があるんだ」

【詩桜】

「念の為、チェックインを20時と覚えておいてよかつた……もう少しだけ君を味わえる」

【詩桜】

「ちゅう……その耳、味わつてやりたいな……ん、何する気……ひやつ！」

【詩桜】

「ば、馬鹿、私は君の耳を味わう側で、私の耳を君に責めてほしいわけでは……んつ、ひやつ……くつ」

【詩桜】

「それなら私は首筋だ……れろつ、れろ、れろお……
…フフ、どうだ……んつ！ 舌を挿れるな……」

【詩桜】

「そこまでするなら、君がじつと見ていたこの胸に
触れてはどうだ？ 服の上からであれば……」ま
かせる範囲だろう

【詩桜】

「んつ、ふつ、はツ……君の手の動き、いやらし
いな……んつ、服の上からだからな、もう少し強
く揉んでもいい……」

【詩桜】

「はあっ、はつ、服の、中は……君が、最後まです
るのを我慢できるのであれば……その、過激にな
りすぎない範囲で……」

【詩桜】

「君は……どうだ？ 我慢できるのか？ 中に挿れ
るのは……いや、しかし……その、口でしてやる
くらいは……だが、吐唾のときには、運転席に誰も
いないといつのは……」

【詩桜】

「そうだ！ 運転席に座りながら手でしてやる分に
は……ギアを握っていると思われるんじゃない
か！？」

【詩桜】

「うわあつー！」

【詩桜】

「なつ、なんだ、人がいたのか！？ すまない、君
には迷惑をかけないようにしてみせる……あつ」

【詩桜】 「し、鹿……？ エゾシカか……道路へよく出でくるとは聞くが……」

【詩桜】 「そういえば、さつきからコツコツ音がしていた気がする……私たちのキスは、この鹿に見られたのか……」

【詩桜】 「ああ、車体は大丈夫な筈だ……頑丈な造りだし、そもそも「うついた衝突を前提に作られている」「しかし、やはり……周囲に何もない場所で、迂闊な行いはするものではないな……私とした」とが、よく反省する」

【詩桜】 「警察であれば、君も一緒に注意を受けると」「うだつた……私一人で責任をとれる範囲ならいいが、君に迷惑をかけてはいけないな」

【詩桜】 「ただ、車の中では身体が熱くなつた」

【詩桜】 「いずれまた場所を変えて……安全を確保できる場所で、また……な」

【詩桜】 「それと宿に着いて、温泉も入つて、二人きりになつたら……今日は手でしてやるつもりだ」

【詩桜】 「君も好きなだけ私の胸を楽しむといい」

【詩桜】 「オーディエンスは……もつ去つてしまつたようだ」

【詩桜】

「出発する前にもう一度だけキスをしよう……もち
ろんソフトなものかな」

【詩桜】
「んっ」

「それじゃあ最後まで旅を楽しもう……はは、君と
の旅行は楽しい」

09徒徒然然草

【詩桜】 「……ん、なんだ」

【詩桜】 「ああ、これか？ 今日は勉強ではなく、創作の方をしている」

【詩桜】 「そしてこれも毎回書いているが……君が来るとわかつている時間に、君がいるとできない活動はない」

【詩桜】 「執筆をしていると書くとも、今は思いついたネタを書き留めている程度だ」

【詩桜】 「君の手が空いたのなら少し話そっか？」

【詩桜】 「はは、だから……それほど氣を使わなくてもいい」というのに

【詩桜】 「いずれ共に過ごすことになつても、私の仕事場は分けるつもりだ」

【詩桜】 「このマンションをそのまま借りて、執筆に集中したい時はここへ来るという形でもいいな」

【詩桜】 「というわけで、私は自分の執筆する環境作りの術は心得ている」

【詩桜】 「その点で君が私に気を使う必要はない……まあ、来るなと言っているのに仕事場へ来たり、集中すると言つていてるのに理由もなく会いに来たら追い返すが」

【詩桜】 「ん？ これはこれでパートナーとして傲慢か？」

【詩桜】 「受け取り方によつては、私が執筆に入つたら、君には我慢を強要しているようにも聞こえるな」

【詩桜】 「私はこれを生活の糧としている以上、今後どうあつても、生活の面で君と折り合いをつけなければならぬ場面が多々出でてくるだろ？」

【詩桜】 「だが創作には妥協ができるても、君というパートナーは替えが利かない」

【詩桜】 「私が冷静さを欠いて傲慢になつていたら、落ち着いたあとでよく叱つてやつてくれないか？」

【詩桜】 「はは、君なら私の活動をよく理解して、そう言つてくれるだろ」「ともわかつてゐる」

【詩桜】 「しかし私がそれをわかつてしまつてゐるのもよくない」

【詩桜】 「この意識がある限り、先ほどの発言然り、私は仕事を生活の中へ割り込ませ、君にずるずると甘えていつてしまふだろ」

【詩桜】 「普段は別にいいんだ、お互に譲り合ひもできるだろ？」

【詩桜】 「だが切羽詰まつたときこそ、積もり積もつたものがお互いの関係を崩しかねない」

【詩桜】

「私は元々人間関係に嫌気が差して、それが必要な場面でも逃げてきた人間だからな」

【詩桜】

「一人で生きて一人でくたばるのならいいが、君と
いう大切な人ができた以上、そうはいかない」

【詩桜】

「君が私を叱れないのなら、頭がかつかきている未
来の私に向けて、今のうちに一筆書いておこう」

【詩桜】

「『私はこの人を一生愛すると決めた、頭を冷や
せ』」

【詩桜】

「よし書けた。もう一度読むぞ。『私はこの人を一
生愛すると決めた、頭を冷やせ』……」れどよ
し」

【詩桜】

「作家なんてものはな、誰もが多かれ少なかれ『自
分の作品様のためなら、世界の全てがその品質向
上のために協力すべきだ』と本気で考えている傲
慢な生き物だよ」

【詩桜】

「実際、以前の私はそれで何一つ悪びれていなかつ
たし、今でも赤の他人に対してもそう思つてい
る」

【詩桜】

「だからまあ、君に対しても認識を改めたいんだ」

【詩桜】

「『私の恋人様のためなら、私の作品全てが、私と
私の恋人の円満な関係のために協力すべきだ』と
な」

【詩桜】

「……なんてことを今は言つても、いざ追い詰められれば簡単に『私の仕事の邪魔をするな』と君に理不尽を押し付けるのが私という人間だ」

【詩桜】

「だからそんな時は、私を叱るか、この書き置きを見せて、私の頭を冷やしてやつてくれ」

【詩桜】

「私というどうしようもない人間と末永く付きあつてほしい」

【詩桜】

「君という恋人がお気に入りなんだ」

【詩桜】

「……君もつづくづく、難儀な恋人を持つたものだな」

【詩桜】

「私を足で選んだことを後悔するぞ」

【詩桜】

「いや、足で選んだわけじゃないか……胸かもしれないな。外見的特徴であればわかりやすく結構だ」

【詩桜】

「私が君を選んだ理由は……私は、行動力のある人間が好きだからな」

【詩桜】

「君を少し気に入り始めていたところに、私と同じ大学へ進学すると言わされて、その熱烈な告白に胸を射抜かれたよ」

【詩桜】

「もっとも、その努力と結果が伴つてのものだが」

【詩桜】

「あとは、ドラマチックな出来事もあったしな」

「ただ、何度も言うが、絶対にまた生活のすり合わせにおいて私たちは揉める」

【詩桜】

「そのたびに場面場面で仲直りしていく……私も、この傲慢な性格を君に向けるのはやめたいと努力している。しているんだ、努力だけはな」

【詩桜】

「実際にどんな形で揉める可能性があるかと言えば……そうだな」

【詩桜】

「たとえば……一般的な会社に務めていれば育児休暇は貰えるが、私の場合はそれがない」

【詩桜】

「もちろん関係各所に向こう数年は育児に専念する旨を連絡はする。しかし、税金関係で税理士との打ち合わせは毎月あるし、私の狭い交友関係の中でも、頼まれ事をすれば断れない場面がきっと出てくる」

【詩桜】

「その時は君も仕事で忙しい筈だが、育児を頼まなければいけない場面が多く出てくる筈……ん、なんだ。私は何かおかしいことを言つたか?」

【詩桜】

「何を今さら照れているのかわからないが、さんざん私に中出ししているだろう」

【詩桜】

「いつかは当たるし、私は産むぞ」

【詩桜】

「母子ともどもよろしく頼む」

【詩桜】
「女の子は必ず欲しいな」

【詩桜】
「君の血を受け継いだ女の子といふことは、将来的に、ひよりんに似る可能性が高い……いわば、私とひよりんの子と言えるかもしねい」

【詩桜】
「フフフ照れてしまった……溺愛してしまってうだ」

【詩桜】
「想像したらすぐにでも娘が欲しくなった、今から子作りするか」

【詩桜】
「ん？ 安直すぎる？ そこは行間を読んでひいてい

【詩桜】
「君に愛されたくなつたんだよ」

【詩桜】
「末永く、よろしく頼む」

10カタカタループ

【詩桜】

「ん——」

【詩桜】
「違つか」

【詩桜】
「(イ)ベ(イ)ん——」

【詩桜】
「ふう……」

【詩桜】
「いや……ん——」

【詩桜】
「(すう)ふう——」

11 ドライブループ

【詩桜】

「……そろそろ曲を変えるか。君の好きな音楽をかけていい」

【詩桜】
「今の景色よかつたな」

【詩桜】
「目的地変えるか……」

【詩桜】
「少し退屈だ、なんでもいいから話しかけてくれ」

【詩桜】
「(ニヘニ)ん……」

【詩桜】
「ん? なにを見ている?」

【詩桜】
「次にコンビニ見つけたら寄りたいな……」

【詩桜】
「ん? この道で合ってるよな?」

【詩桜】
「あの車、いい度胸している……」

【詩桜】
「あまり人の横顔を見るな、少し照れる」